

水ぼうそうウイルスが再活性化

65 歳になったら予防接種 帯状疱疹ワクチン

年齢を重ねると免疫力が落ち、細菌やウイルスに感染しやすくなります。新型コロナウイルスでもインフルエンザでも感染すると、重症化しやすく、死亡リスクが高くなります。

私が前期高齢者（65 歳から 74 歳）の仲間入りしたとき、感染症の専門家に、高齢者には何か必要かと聞きました。免疫力を高めるため新型コロナとインフルエンザに加え、肺炎球菌と帯状疱疹（ほうしん）のワクチンは接種しておいたほうがよいとのことでした。

このうち、帯状疱疹はインフルエンザと同様、個人予防に重点を置いた「B 類疾病」に位置づけられました。4 月から 65 歳を対象に定期接種化されます。帯状疱疹にはこれまで多くの人が痛い目にあっています。

10 年ほど前のことです。糖尿病が持病で、当時 60 歳だった先輩外科医は、仕事が忙しかった晩夏に突然右胸部の肋骨（ろっこつ）に沿った神経痛に襲われました。

痛みは強く 2 日後には赤い発疹と水疱（すいほう）が出現し、帯状疱疹と診断されました。入院して抗ヘルペスウイルス薬と鎮痛剤の治療を受けました。発疹が軽快し退院しましたが、その後もやけるような痛み（神経障害性疼痛＝とうつう）が半年ほど続き、強力な痛み止めを使い続けました。痛みは徐々に良くなったものの、患部の違和感は長く続きました。

帯状疱疹は「水痘・帯状疱疹ウイルス」が起こす感染症です。帯状疱疹は子供がかかる水ぼうそう（水痘）と同じウイルスが原因で起こります。

記憶があるかないかは別にして、9 割以上の方が子供のころに水痘に感染しています。このウイルスは一度、感染すると症状が消えても体の中に残ります。しかも知覚神経の中に潜んでいます。

年齢を重ねたり、ストレスで免疫力が落ちたりすると、ウイルスは再活性化して、知覚神経の中で増殖し移動、神経に沿った疼痛（神経痛）と帯状に連なる発疹と水疱を発症します。

帯状疱疹を発症すると、水疱の時期は 2 次感染を起こすことがありますので注意が必要です。

日本では毎年 1000 人当たり 4 人ほどが帯状疱疹に発症します。40 代まではまれで、50 歳を超えると急に増加し、70 代がピークです。80 歳までに 3 人に 1 人が経験します。現在、高齢者の帯状疱疹が増えており、とくに女性で顕著です。

■激痛、麻痺リスクを回避

帯状疱疹で厄介なのは、顔面に発症したときと 3 カ月以上続く強い神経痛（帯状疱疹後神経痛）です。

目に起こると、痛みだけでなく、角膜炎や結膜炎を起こし、視力に障害を残すことがあります。耳の領域に起こると、難聴や耳鳴り、めまいが生じます。顔面神経麻痺（まひ）が起こることもあります。まれに脳炎や髄膜炎を併発します。

帯状疱疹後神経痛は、先輩外科医のように強い神経痛で、50 歳以上の帯状疱疹患者の 1 割ほどにみられます。高齢な人ほど、発症時重症な人ほど、神経痛が残りやすいといわれています。

予防はワクチンです。ワクチンは 2 種類あり、生ワクチンとサブユニット（組み換え）ワクチンです。どちらも 50 歳以上の人に対して高い予防効果があり、費用対効果も良好です。

違いは接種に伴う副反応と 10 年以上の長期にわたる予防効果です。組み換えワクチンは、生ワクチンより疼痛などの副反応が強いぶん、効果は長く続くようです。